

森有正の物語詩『大審問官』研究:自由の概念

木寺律子

はじめに

本論では、日本の著名な西欧哲学者でプロテスタントである森有正（1911-1975）のドストエフスキー論を、彼が行なった物語『大審問官』の解釈を中心にして考察する。森有正は生涯にわたって様々な問題を提起したが、自由の問題の解釈は彼の研究のうちで重要な位置を占めている。そもそも「自由」とは西欧哲学において大変重要な概念で、多くの神学者や哲学者によって非常に多くの論考がなされてきた。森有正は、自由の概念が人間にとっていかに重要であるかを、次のように述べている。

近世の欧米の歴史は、このような自由の探求と要求の堆積の上に築かれ、今なお発展しつつあるものである。それは人間が自らを真に人間らしい人間に形成しようとする努力である。¹

この彼の自由の問題の研究に多くの影響を与えたのが、ロシアの作家 F.M. ドストエフスキー（1821-1881）の晩年の大作『カラマーゾフの兄弟』（1880）の中に収められている物語詩『大審問官』である。物語詩『大審問官』は、長編小説『カラマーゾフの兄弟』の中でロシアの田舎町を舞台にして、無神論的傾向が強いものの基本的にはロシア正教徒の登場人物である若き知識人イヴァン・カラマーゾフによって創作された作品の草案である。イヴァンは、この草案を自分の弟であるアリョーシャに個人的な場で物語る。イヴァンによると、スペインのセビリヤにキリストが現れるが、大審問官がキリストを捕えて牢屋に入れてしまう。夜、大審問官はキリストの元を訪れて話をする。この物語詩『大審問官』は『カラマーゾフの兄弟』から半ば独立した作品として扱われ、その思想の深淵さによって森有正を含む多くの思想家や哲学者の関心を惹きつけ、多くの先行研究の対象となってきた。

しかし森有正はフランス哲学の専門家であるため、森有正についての膨大な先行研究のほとんどは彼のフランス哲学についての論考を対象としており、彼のドストエフスキー論は知名度が高いわりにあまり研究されないままになっている。例えば、萩原俊治は翻訳文学を読むことについて論じる際に、森有正がロシア語原文でドストエフスキーを読んでい

¹ 森有正「自由と責任」『森有正全集 6 巻』筑摩書房、1979 年、195-341 頁。『自由と責任』は最初 1956 年に河出書房から出版された。

ないにもかかわらず彼のドストエフスキー論が優れていることや、森有正がやはりプロテスタントの家庭に生まれた作家アンドレ・ジイド（1869-1951）のドストエフスキー論²を読んだ時にどう理解したかについて書いている。しかし萩原俊治は物語詩『大審問官』の解釈には言及していない。³

本論では、物語詩『大審問官』における自由の概念についての森有正の考えを考察するために、『大審問官』のプロトタイプとして知られる W.H.プレスコット（1796-1859）の歴史書『スペイン王フェリペⅡ世の治世の歴史』や、ロシア文学とドストエフスキーに強い影響を与えたことで知られるドイツの作家ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749-1832）の『エグモント』（1788-1789）に描かれるエグモント伯の人物造形、新約聖書なども参照し、これらを物語詩『大審問官』における大審問官やキリストの像と比較検討する。その上で森有正の説を考察することは、物語詩『大審問官』の特徴を再考することでもある。

1. 森有正のドストエフスキー理解と自由の問題

森有正はプロテスタントの家庭に生まれた。彼は東京大学で教鞭をとってフランス文学とフランス哲学の指導を行い、ブлез・パスカル（1623-1662）やルネ・デカルト（1596-1650）の研究を行ったが、ドストエフスキーにも強い関心を持っていて『ドストエフスキー覚書』（1950）を執筆した。『ドストエフスキー覚書』ではドストエフスキー文学のさまざまな作品が論じられているが、『カラマーゾフの兄弟』については5章「ドストエフスキーにおける「自由」の一考察：『大審問官』の場合」で、自由の概念を中心に論じられている。また、「自由について：殊にドストエフスキーを中心として」（1949）や⁴、「自由と責任」（1956）の中の第2章「自由と人間の現実：殊にドストエフスキーをめぐって」でも、森有正はドストエフスキー文学と自由の問題について論じている。⁵ 1950年に最初は一年の予定でパリに留学したが、そのままパリに残って滞在することになり、東洋語学校で日本語・日本文学を教えながら研究活動を行った。彼はフランスに堪能で、晩年には日記をフランス語で付けていた。論文執筆のほかに随筆の執筆でもよく知られている。晩年の論文や随想の中でも森有正はたびたびドストエフスキーに言及していて、ド

² アンドレ・ジイド（寺田透訳）『アンドレ・ジイド全集』第14巻，新潮社，1951年。

³ 萩原俊治「ドストエフスキーと『最初の暴力』：外国語の他者性と催眠術としての物語」『人間科学：大阪府立大学紀要』2号，2006年，21-49頁。

⁴ 森有正「自由について：殊にドストエフスキーを中心として」『森有正全集6巻』筑摩書房，1979年，123-152頁。「自由について：殊にドストエフスキーを中心として」はもともと『世界観の探求』（1949年，河出書房）に発表された。

⁵ 同上，195-341頁。

ストエフスキーのキリスト教的な要素を高く評価している。

もっとも森有正はロシア文学の専門家ではない。森有正がフランスの哲学者であるパスカルの思想を論じるときにはフランスや西欧諸国の歴史的・社会的事情を精査した上で緻密な論を展開しているが、ドストエフスキーを論じるときにはロシアの歴史的社会的事情をほとんど踏まえておらず、主にパスカルやデカルトやセーレン・キェルケゴール（1813-1855）といった著名な西欧哲学者の思想と比較することによって、幅広い視点からドストエフスキーの思想を哲学的に論じている。『ドストエフスキーの哲学—共同討議』で森有正は和辻哲郎、高坂正顕、西谷啓次、唐木順三らと対談を行っているが、彼は西谷啓次の「…キリスト教といっても西ヨーロッパの人々のカトリックや、プロテスタンティズムと、ギリシア正教徒は非常に違っている…」という意見に対して「違っていると言っても、キリスト教はキリスト教ですからね。」と反論し、⁶ 更に西谷啓次の「しかしドストエフスキーはプロテスタントはほんとのキリスト教じゃないと言っている。」という指摘にも「僕が会って話せば認めてくれる。(笑声) とにかくキリスト教の中心はイエス・キリストで、それはギリシア正教、カトリック、プロテスタントがどう解釈しようと思わらない。」と答えている。⁷

このような森有正は物語詩『大審問官』に関しても、イヴァンが語るのはロシアの地においてであることは重視せずに、この作品に描かれたのはカトリックとプロテスタントの問題であると捉えている。森有正は「大審問官は言うまでもなくカトリック教会の化身である」⁸ と指摘し、物語詩『大審問官』において「その問題の中心は自由の問題である」⁹ としてから『カラマーゾフの兄弟』から大審問官の言葉を引用し、その後次のように詳しく論じている。

ここで大審問官のいう自由は、人間の生命への欲求、生きかつ幸福になりたいという素朴な要求である。「教会」は、キリストの事業の継承者として、この自由を人々に保証した。しかし、この「教会」の与える自由は、キリスト自身の意味した自由とは本質的に異なるものであった。教会の自由は、人間が幸福でありたいという自然の衝動を満たすことによって実現される。故に人間の欲望を充す一定の組織ができあがれば、それにすべてを委任し、それに服従することによって、人間は自由を享受することができる。しかもそのことは人間の真の独立、精神的・人格的存在としても自由と権威とを喪失することにほかならない。問題は、自由が、単に自己の

⁶ 和辻哲郎、高坂正顕、森有正、西谷啓次、唐木順三『ドストエフスキーの哲学：共同討議』創文社、1967年、222-223頁。

⁷ 同上、225頁。

⁸ 森有正『ドストエフスキー覚書』筑摩書房、1967年、131頁。

⁹ 同上、131頁。

傾向に従うことではなく、自己の傾向から自由になること、言い換えれば精神としての自己を自覚することを意味しているのである。キリストはこのような意味の自由を実現したのであった。けれども「教会」はこのような自由を棄ててしまった。ドストエフスキーは、ここで、大審問官によって明らかにカトリック教会を意味している。しかしそのカトリック教会から自己を解放したルネサンスのヒューマニズムの自由は、やはり人間の自然の本性に従う自由であって、本性からの自由ではなかった。エラスムス、モンテーニュ、デカルトの意味した自由はみなそのような、自然に従う意味の自由であった。人間が自己に対して自由になることを、したがって真の愛の可能性を教えたのは、宗教改革者たちであった。¹⁰

森有正によると、自由の概念は必ずしもいつも同じように理解されてきたわけではなく、時代によってさまざまに異なる解釈がなされてきた。カトリック教会は組織として完成した後には服従する人々に自由を与えるようになり、これによって自由な信仰の在り方に矛盾が生じることとなった。森有正は作品中の大審問官はカトリック教会の象徴であることを再び強調した上で、カトリック教会の問題点はルネサンスのヒューマニズムや、エラスムス、モンテーニュ、デカルトなどによって解決が試みられたが、これらの解決策はまだ完全でなく、宗教改革者、つまりプロテスタントにおいてより解決が進み、人間が自己に対して自由になることと真の愛の可能性が示されたというように、西欧史の順序に従ってさまざまな西欧思想家たちを列挙して、物語詩『大審問官』に書かれていることもこの西欧史の順序に従って理解している。その後森有正は物語詩『大審問官』に見られる考えの独自性や新しさに多少言及して論を締めくくっているが、それがカトリック教会の抱える問題がロシア正教会にはないということなのか、カトリック教会の問題を克服したプロテスタントをもさらに超えるものをドストエフスキーが独自に提示したのかといったことにまでは言及していない。

この点において森有正の説は、カトリックやプロテスタントよりもロシア正教の思想の方がより神に忠実であることを常に基礎としつつ自説を展開する V.ローザノフの大審問官伝説の研究¹¹ や、物語詩『大審問官』で描かれる教会の統治の問題点はカトリックにもロシア正教にもあるとする桶谷秀昭の説¹² とは異なる。森有正は、ロシア正教ならではの独自の問題提起には西ヨーロッパの哲学史に納まりきれないものがあることや、ロシア正教の立場から鋭いカトリック批判があることを考慮していない。例えばエリザベス・ブレイクは、ドストエフスキーが描く大審問官の人物造形にはカトリックといってもポーランドのカトリックに対する批判が込められていて、そもそもドストエフスキー文学において

¹⁰ 同上, 132-133 頁。

¹¹ *Розанов В.В. Легенда о великом инквизиторе, две статьи о Гоголе. München, 1970.*

¹² 桶谷秀昭『ドストエフスキー』河出書房新社, 1978 年, 229 頁。

カトリックというと主にポーランドのカトリックのことであり、ドストエフスキーがカトリックに批判的なのはポーランドに対して政治的に批判する意図があるからであると繰り返し強調しているが,¹³ 森有正はそういったロシアの歴史的・政治的・事情を問題にしていない。

2. 物語詩『大審問官』のプロトタイプである歴史書

それではドストエフスキーの物語詩『大審問官』の中では、ロシア正教とカトリックとプロテスタントの思想的立場の違いや歴史的関係が明確になっているのであろうか。物語詩『大審問官』をよく読むと、実はそうではないことが分かる。

16世紀のスペインを舞台とする物語詩『大審問官』が、W.H.プレスコットのスペイン史を記述した歴史書『スペイン王フェリペⅡ世の治世の歴史』をプロトタイプの一つとしていること¹⁴、ドストエフスキーはプレスコットの歴史書を高く評価していたことはすでに知られている。アメリカの歴史家プレスコットはスペイン語圏の歴史研究の分野で大変著名で、豊富な資料に基づいて客観的に歴史を記述する歴史研究の方法を確立した人物である。『スペイン王フェリペⅡ世の治世の歴史』には、ネーデルランドの民衆が宗主国スペインに対して暴動を起し独立を求めたことも書かれているが、それまでに書かれていたフリードリヒ・フォン・シラー (1759-1805) の『ドン・カルロス』(1787) や『オランダ独立史』、ゲーテの『エグモント』といった有名な文学作品がネーデルランドやプロテスタントの立場から歴史上の偉大な人物を描いているのに対して、プレスコットはスペインの歴史とカトリックの王国としての立場をよく理解した上で歴史を叙述している。

ところが、このプレスコットの歴史書を物語詩『大審問官』と比較すると、物語詩『大審問官』では作品の舞台となる時代や場所の設定が極めて曖昧であると分かること、これには、物語詩の作者であり『カラマーゾフの兄弟』の主人公の一人であるイヴァン・カラマーゾフが、スペイン史についての不正確な知識しか持っていなかったことをコミカルに描くドストエフスキーの意図が働いていることは、拙論ですでに指摘した。¹⁵ 物語詩『大

¹³ Elizabeth A. Blake, *Dostoevsky and the Catholic Underground* (Evanston: Northwestern University Press, 2014).

¹⁴ プレスコットの歴史書が物語詩『大審問官』の創作のプロトタイプとなったことについては、K.A. ステパニヤン、ジャック・ヴァイナー、V.E.バグノなどが指摘している。Степанян, К.А. Севильский кафедральный собор и поэма «Великий инквизитор» // Достоевский и мировая культура. № 24. 2008. С. 109-116.; Jack Weiner, *From Earthly Paradise to Hell on Earth: Spain in the Works of Dostoevsky*. (Valencia: Albatros Hispanofila, 1989), pp.58-59., Багно, В.Е. К источникам поэмы «Великий инквизитор» // Достоевский: материалы исследования. № 6. Л., 1985. С. 107-119.

¹⁵ 木寺律子「ドストエフスキーの物語詩『大審問官』とプレスコットの歴史書」『鳥取環境大学紀要』13号, 23-32頁。

審問官』の舞台は作中作者イヴァンが言うように本当にスペインのセビリアなのか、それともスペインの首都マドリドやネーデルランドの町ブリュッセルにおける状況を実質的に描いたものなのか、また、スペイン国内に残っていたイスラム教徒やユダヤ教徒に対して行われた異端審問を描いているのか、その後ネーデルランドに流入したプロテスタントに対して宗主国スペインが行った異端審問を描いているのか明快でないのである。¹⁶

作中作者イヴァンが物語詩『大審問官』の背景となる歴史や地理や宗派を混同しているとなると、森有正のこの物語詩の解釈でも宗派の理解に混乱が生じるのは当然の結果であろう。

3. プレスコットの歴史書と物語詩『大審問官』の類似点

それでは、プレスコットの歴史書と物語詩『大審問官』の間には全く類似点がなく、歴史的地理的事情をあえて混同して曖昧にしている物語詩『大審問官』に、ドストエフスキーが小説執筆にあたって参考にしたとされるプレスコットの歴史書の中身は何も反映されていないのであろうか。このプレスコットの歴史書と物語詩『大審問官』をさらに比較して、どのような点において歴史書が物語詩のプロトタイプとなっているのかを考えていこう。

プレスコットの歴史書では、歴史のみが淡々と叙述されている。英雄伝といった要素を排除して書かれたことがこの歴史書の特徴である。一方で物語詩『大審問官』には歴史的記述がほとんどなく、民衆や大審問官やキリストの様子が物語詩の作者イヴァン・カラマーゾフの文学的想像力によっていきいきと描写される。このため、物語詩『大審問官』とプレスコットの歴史書の間には類似点はあまりない。しかし、物語詩『大審問官』に影響を与えた可能性のある箇所を探してプレスコットの歴史書を丹念に読み込んでいくと、一か所だけ類似する箇所が見つかる。プレスコットの歴史書の中のエグモントと司教の対話が、物語詩『大審問官』のキリストの前での大審問官の独白に酷似しているのである。¹⁷

プレスコットによると、ネーデルランドの民衆がプロテスタントの影響を受けて暴動を起こしたりカトリック教会を破壊したりするようになり、宗主国スペインから独立しようという雰囲気が広がり始める。騒動を鎮めるためにスペインからアルバ公がブリュッセルに派遣される。ブリュッセル到着後すぐにアルバ公は、ネーデルランドの民衆に対して理解を示していたエグモント伯がプロテスタントを十分に厳しく取り締まっていなかつ

¹⁶ 木寺「ドストエフスキーの物語詩『大審問官』とプレスコットの歴史書」27頁。

¹⁷ S.A.キバーリニクはエチエンヌ・カベール (Э. Кабел) の作品『イカリア旅行記』(«Путешествие в Икарию»)にも、牢獄での会話という類似するエピソードがあると指摘している。Кибальник С.А. О философском подтексте формулы «Если бога нет...» в творчестве Достоевского // Русская литература. 2012. № 3. С. 153-163.

たとして、エグモントを捕えて裁判を行い、彼を 1567 年に死刑に処す。深夜、死刑判決を司教がエグモントとホールネに伝えに行くことになる。エグモントと個人的に親しかった司教はこれを悲しむが、自分の職務を果たさなくてはならなかった。

もう深夜だった、彼〔司教のこと―引用者注〕はエグモントの部屋に入った。そこで彼は疲労困憊して深く眠っている不幸な囚人を見つけた。二人の被告はブリュッセルにおいて、彼らは裁判を終えて釈放されるというむなしい望みを持っていたという。

エグモントはこのような知らせを聞く心の準備ができていなかったということである。司教の言葉に、彼は青くなり、ひどく興奮して、こう叫んだ。「これは残酷な判決だ！私の神や王に対する行いのうちに、このような刑罰に値するものがあつたと、私は一度も思ったことはない！私は死を恐れはしない―死は我々皆の共通の宿命だ―しかし私は不名誉が恐ろしい。しかしながら、私は、私の家族が私と一緒に死ぬのではなく、私の財産がさしおさえられるようにはならないことを期待できる。これは少なくとも、私はこれまでの奉公に対する褒美として要求できる。」その後しばらく沈黙してから、彼は「神と王の意志によって、私に死が定められた時から、私は忍耐強くこれを待つ。」と付け足した。その後、彼は司教に、何かまだ救われるという希望はないのかと尋ね、否定の返事を受け取ると、予定される別の世界への移行の準備を始めた。彼は素早く起き上がり、急いで服を着て、その後司教の元で懺悔し、ミサと聖体拝領を希望した。彼の望みは遂行され、ミサは大変荘厳に行われた。そしてエグモントは大変敬虔に聖体を拝領し、自己の罪について心からの後悔を表明した。彼はさらに司教にこの最後の試験に耐えるには、どのような祈りが彼の支えになるかを尋ね、司教は、救世主が自分の教え子に与えた祈りを提案した。この提案はエグモントの気に入りに、重々しい調子で懺悔をした。¹⁸

この後、エグモントは友人や妻に手紙を書き、翌朝 10 時には処刑される。エグモントの処刑には司教が立ち会い、エグモントは処刑場でももとは自分の同僚であった兵士たちに挨拶して死刑を受ける。エグモントに続き、ホールネも処刑される。

深夜の牢獄での囚人と僧侶の対話、および、僧侶が翌朝の死刑のことを伝える様子というモチーフは、物語詩『大審問官』における大審問官が、沈黙する囚人のキリストの前で自分の立場について語り、翌朝にはキリストを処刑すると宣言する様子に受け継がれているのではないだろうか。物語詩『大審問官』では大審問官がキリストの前で話す様子が長く描写されるが、その冒頭だけを引用しよう。

¹⁸ Прескот У.Х. История царствования Филиппа Второго короля испанского в двух частях. Пер. с англ. Ч. 1. Кн. 2. СПб., 1868. С. 206-207.

深い闇の中で突然、牢獄の鉄の扉が開き、大審問官の老人自身が蠟燭立てを手に持ってゆっくりと牢獄の中に入ってきた。彼は一人で、扉は彼の後ろですぐに閉まった。彼は入口のところまで立ち止まり、長い間、1分間か2分間、彼の顔をじっと見ていた。とうとう、静かに近づき、テーブルの上に蠟燭立てを置き、彼に言った。「これが、おまえか？おまえか？」しかし返事をもらわないうちに、素早く付け足した。「いや、答えるな。黙っている。」¹⁹

ブレスコットの歴史書では哲学的問題はあまり提起されていない。しかし、エグメントとホールネの死刑を町の人々が悲しんだことを叙述するときに、「自由」の問題に一言だけ言及している。

自由を求めた受難者として、民衆が尊敬した人の処刑の影響はこのようなものであった。²⁰

これも物語詩『大審問官』の主題である「自由」の問題を思い起こさせる。

ブレスコットによると、エグメントの処刑をフェリペ2世に報告し、異端審問の必要性を力説するときに、アルバ公は以下のように述べている。民衆の精神的な弱さを前提にして国家の統治を考えるこの文章も、ドストエフスキーの物語詩『大審問官』の大審問官の発言を思い起こさせるものである。

この国の民衆は——と彼は書いている、——このように「弱い性格」をしているので、もし陛下が彼らに赦しを与えることが不可欠であるとお考えなら、彼らは今のようにあなたに反抗するというので、まもなくあなたを責めなくてはならないとなると、私は確信しています。²¹

この文章を、物語詩『大審問官』の大審問官が語る言葉と比較してみよう。

彼はとうとう自由を征服して、人々を幸福にするためにそうしたのであることを、自分の功績だと考えているんだ。なぜなら、今になってやっと（つまり、彼はもちろん異端審問のことを言っているんだ）初めて、人々の幸福について考えることができるようになったのだ。人々は暴徒として創られている、暴徒が幸福になることができるだろうか？²²

¹⁹ *Достоевский Ф.М.* Полн. собр. соч. В 30 томах. Т. 14. Л., 1973. С. 228. ドストエフスキーの著作からの引用はすべてこのアカデミー版ドストエフスキー全集による。

²⁰ *Прескотт.* История царствования Филиппа Второго короля испанского в двух частях. С. 226.

²¹ Там же. С. 226-227.

²² *Достоевский.* Пол. собр. соч. Т. 14. С. 229.

民衆の幸福のためにはかえって自由を彼らに与えるべきでないとする点において、プレスコットの歴史書に描かれる状況は、物語詩『大審問官』の主題と合致している。物語詩『大審問官』はプレスコットの歴史書が描く歴史的事実をそのまま引き写しておらず、それどころかかえって意図的に混同しているが、やはり重要な問題提起をプレスコットの歴史書から得ているのである。

4. ゲーテの『エグモント』と物語詩『大審問官』の類似点

エグモント伯の人物像は、ゲーテの戯曲『エグモント』にも描かれている。プレスコットの歴史書『スペイン王フェリペⅡ世の治世の歴史』はスペイン寄りの立場から歴史を記述しているが、ゲーテはネーデルランド寄りの立場から西洋史を描いている。『エグモント』は、ネーデルランドの民衆がプロテスタントティズムを受け入れ始め、カトリックの宗主国スペインからの独立を勝ち取っていく様子を描いた作品である。ネーデルランドのために尽くした英雄エグモントの人物像と、民族の独立に関わる自由の高邁な精神が作品の主題となっている。

『大審問官』のプロトタイプになるドイツ文学作品としては、やはりネーデルランドと宗主国スペインを描いているシラーの『ドン・カルロス』が広く知られている。²³ しかし、物語詩『大審問官』には、シラーだけでなくゲーテの『エグモント』の影響もあるのではないだろうか。仲井幹也も『エグモント』を論じる際に、『エグモント』に描かれた議論をドストエフスキーの物語詩『大審問官』が究極的に推し進めたことに少しだけ言及している。²⁴ ゲーテの『エグモント』と物語詩『大審問官』の類似点を見ていこう。

まず『エグモント』では、ネーデルランドの住民はエグモントを敬愛していて、エグモントが町に現れると人々は彼の姿を見て喜ぶ様子が描かれる。この様子は物語詩『大審問官』においてセビリヤの住民がキリストの姿を見て喜ぶ様子に類似している。

自由の問題を論じる際には、さらに共通する要素が見られる。

ゲーテの『エグモント』ではネーデルランドにおけるエグモントの運命が描かれるが、この小説には深夜の牢獄での対話は書かれていない。ゲーテの『エグモント』でエグモントが自由の問題について自分の考えを語るのはアルバ公に対してであり、プレスコットの描いた司教や物語詩『大審問官』に登場した大審問官に対してではない。このように場面

²³ ドストエフスキーが子供の頃からシラーの影響を受けてきたこと、シラーの『ドン・カルロス』が『カラマーゾフの兄弟』に影響していることについては多くの研究があるが、例えばダニレフスキーも述べている。Данилевский Р.Ю. Фридрих Шиллер и Россия. СПб., 2013. С. 464-490.

²⁴ 仲井幹也「ゲーテ『エグモント』の輻輳性と解釈の可能性について」『経営と経済：長崎工業経営専門学校大東亜経済研究所年報』91巻3号，2011年，23-23頁。

設定の細かい点は物語詩『大審問官』と異なる。しかし、『エグモント』におけるエグモントとアルバ公の対話は、物語詩『大審問官』における自由についての問題提起を思い起こさせる。エグモントに対するアルバ公の答えも、民衆をどのように支配すべきかを語っているが、民衆の弱さを前提にしたアルバ公の自由についての考えは、物語詩『大審問官』の大審問官の考えによく似ている。

アルバ公に対するエグモントの権力者批判は次のようなものである。

宗教はこうも言われている、みごとな壁掛けにすぎない、そのかげでどのような危険な策略も、いっそうたやすく考え出せるような。民衆は跪いて、織りあげられた神聖な模様をおがむ、だがそのかげでは鳥追いが耳をすまして、かれらをたぶらかそうとしている…。²⁵

エグモントが民衆の自由を擁護するので、アルバ公は自由について次のように反論する。

自由だと？美しい言葉だ、だれが正しく理解しておるだろうか！どのような自由を彼らは欲しておるのか？なにが最も自由な人の自由であるのか？—正しい行為だ！—しからば、そのような自由を国王は阻止なさらぬであろう。おっと、どっこい！かれらはおのれの自由を信じないのだ、自分と他人を傷つけることができぬかぎり。退位するほうがましではあるまいか、かかる民衆を統治するくらいなら？[中略]民衆というものは老年にもならない、賢明にもならない。民衆というものはいつまでたっても幼稚なのだ。²⁶

その後エグモントは、ネーデルランドの人々が自分たちの土地で育った人物の統治を望んでいることを話して捕えられる。²⁷

「自由」のテーマは『ドン・カルロス』においても重要だが、深夜の牢獄での会話やスペインの統治者と民衆の側に立つ英雄の対話は『ドン・カルロス』にはない。したがって、この点においてはプレスコット及びゲーテの描くエグモントの人物像が物語詩『大審問官』のモチーフの源泉である可能性が高い。物語詩『大審問官』の舞台となる時代と場所は曖昧であるが、プレスコットの描くエグモントやゲーテの『エグモント』との類似点の多さを考慮すると、物語詩『大審問官』は実質的にはネーデルランドにおけるプロテスタント

²⁵ ゲーテ（内垣啓一訳）「エグモント」『ゲーテ全集4：戯曲』潮出版社、1979年、349-427頁。

²⁶ ゲーテ「エグモント」349-427頁。

²⁷ ゲーテの『エグモント』の歴史的背景と、この作品における内面的な自由の意義の背景となる政治的社会的な自由の問題については中島明彦が詳しく書いている。中島明彦「ゲーテの戯曲『エグモント』の中の特権と自由について」『横浜国立大学人文紀要第二類、語学・文学』20号、1973年、14-30頁。

に対する異端審問を描いており、作品の舞台となる場所は実質的にはエグモントが処刑されたブリュッセルであるとも考えることも可能である。

そうすると物語詩『大審問官』には部分的に、カトリックとプロテスタントの問題を扱っている面もある。したがって森有正が、物語詩『大審問官』が描く世界が扱うのはカトリックとイスラム教の問題やカトリックとロシア正教の問題ではなく、カトリックとプロテスタントの問題だと捉えたのはもっともなことになる。

5. 物語詩『大審問官』における自由

物語詩『大審問官』における自由の問題をさらに踏み込んで考えて行こう。

物語詩『大審問官』の中で、大審問官は沈黙を続けるキリストに向かって話し、キリストが「自由」の名において人々を導いていると批判する。大審問官は聖書の中のキリストが荒野で精霊から三つの誘惑を受けたエピソードについて話すが、彼の話には、いくらか不自然なほど自由の概念が繰り返し強調されて登場する。

第一の質問を思い出せ。文字通りではないかもしれないが、その意味はこういったものであった。「お前は世の中へ行きたいと考えていて、手に何も持たずに、何か自由の誓いだけを持って行こうとしている。生まれつき愚かで横暴な人々は、その誓いの意味を理解することができなくて、恐れ、怖がっている。なぜならば、人間や人間社会にとって、自由ほど耐え難いものはほかにないからだ！むき出しで灼熱の荒野にあるこの石が見えるか？これをパンに変えてみる！そうすれば全人類が感謝して、聞き分けよく群れとなってお前の後について走ってくるだろう。ただ、お前が自分の手を引っ込めて、お前のパンを渡すのをやめはしないかと気遣って永久におどおどしているだろう。」と言った。しかしお前は人々から自由を奪うことを欲しないで、その提案を避けてしまった。なぜならばお前は、もし服従がパンで買われたものなら、どんな自由がありえるのかと考えたのだ。²⁸

大審問官はこの後も、二つ目の誘惑である奇跡も三つ目の誘惑である権力もキリストが自由の名において避けてしまったが、奇跡や権力こそ人々に必要であったのだと、キリストを非難するにあたって繰り返し自由の概念に言及する。

しかし実は、聖書の該当箇所「自由」という表現は一度も書かれていない。新訳聖書のマタイによる福音書(4:1-11)とルカによる福音書(4:1-13)には、荒野の誘惑のエピソードが載っているが、どちらもただキリストが荒野で悪魔から三つの誘惑を受けて拒絶する

²⁸ *Достоевский. Пол. собр. соч. Т. 14. С. 230.*

だけで、キリストが自由の名において誘惑を拒絶したとは書かれていない。²⁹ 杉里直人もキリストは聖書のこの荒野での三つの誘惑の場面で自由について何も言っておらず、物語詩『大審問官』で繰り返されるこの「自由」という概念は本来、より近代的な概念であることを指摘している。³⁰

大審問官は次のように続ける。

いや、[お前はあの世の秘密を伝える権利を—引用者注] 持っていない。それは、以前言ったことに何も付け足さないためだ。おまえがこの地上にいたときにあれほど主張した自由を、人々から奪わないためだ。おまえが再び伝えようとしていることはすべて、人々の自由への信仰を侵害するかもしれないものだ。なぜなら、それは奇跡として起こるからだ。当時、1500年前に、彼らの信仰の自由はおまえにとって何よりも大切だったではないか。「人々を自由にしたい」と当時あれほどしばしば言ったのは、おまえではなかったか。しかし、お前が今これらの「自由な」人々を見た。—突然老人は考え深げな笑いを浮かべて付け足した。—「そうだ、この事業は我々にとって高くついた」—彼は厳しい目つきで彼を見ながら言った。—「しかし我々はとうとうこの事業を、お前の名において、最後までやり遂げた。15世紀の間我々はこの自由のために苦しんできた、しかし、今ではこれをきっぱりと終えた。おまえはきっぱりと終えたことを信じないのか？お前は私を穏やかに見て、私に対して激怒することもしないのだな？しかし、今では、とりわけ今では、これらの人々は以前よりもずっと、全く自由になったと確信している。ところで、彼ら自身が我々に自分の自由を持ってきて、我々の足元に謹んで置いたのだ。しかし、これをしたのは我々だ、お前が望んだのはこんな自由ではないだろう？³¹

²⁹ マタイによる福音書(4:1-11)には次のように書かれている。「1 さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒野に行かれた。2 そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。3 すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」4 イエスはお答えになった。『人とはパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」5 次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、6 言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』と書いてある。」7 イエスは、『あなたの神である主を試みてはならない』とも書いてある」と言われた。8 更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、9 「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」といった。10 すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある。」11 そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。」つまり聖書のこの部分は、人々の自由な信仰が大切どうかではなく、主を信頼して神を信仰することが大切というのが主旨である。

³⁰ 杉里直人「イワンのばか」『ドストエーフスキー広場』(ドストエーフスキーの会) 21号, 2012年, 17頁。

³¹ *Достоевский*. Пол. собр. соч. Т. 14. С. 229.

使徒パウロが唱えた自由の概念を強調して『キリスト者の自由』を執筆したのは、宗教改革の創始者マルティン・ルター（1487-1546）である。³² 物語詩『大審問官』に「自由」という言葉が登場する回数は必要以上に多く、ドストエフスキーはプロテスタントやゲーテやシラーが唱えた自由の概念を皮肉っているようでもあるが、ともかく大審問官の話は自由を問題にしている点でプロテスタントの思想を部分的に踏まえていて、森有正の解釈に合致する。

森有正は自由についてより幅広い観点から論じる際にも、部分的にドストエフスキーに言及している。

ここにおいて、私どもが先にドストエフスキーの上にもみることができた宗教的な実存と、人間的な実存及び社会的な実践、この三つのものがルターの時代においても共に現実として課せられており、ルターがそれに対して、彼なりの回答を与えたことがここに明らかに示されるのである。ルターは宗教改革を起こすことにおいて真の自由と、また神に対する責任とを一つに結びつけて我々に示してくれたのであるが、ヒューマニズムにおける人間解放の思想に対して、あるいは農民戦争に対して、彼は必ずしも十分な回答を与えてくれてはいないのである。³³

このようにして森有正はやはりドストエフスキーの思想をルターの思想と関連づけて論じているが、これは物語詩『大審問官』の中で部分的にプロテスタント的な自由についての考えが取り上げられているためであろう。

もっとも、ゲーテは『エグモント』でネーデルランドのプロテスタンティズムと彼らの独立運動を描いたが、ゲーテ自身がルターやプロテスタンティズムと全く同じように自由の概念を捉えていたとは言えない。³⁴ ゲーテは必ずしもキリスト教に合致しない汎神論的な世界観を持っていたことが知られているが、³⁵ 御牧好隆もゲーテが自由の概念も宗教的な意味における自由とは異なることを指摘している。³⁶ そうすると、物語詩『大審問官』における「自由」のテーマというのは、ロシアに住みながらも西欧式の教育を受けてきた知識人の作中作者イヴァンが、ルターやプロテスタンティズムの自由の思想に部分的に基き、またさらにはゲーテやシラーの自由の思想にも部分的に基づきつつ、

³² マルティン・ルター（徳善義和訳）『キリスト者の自由：訳と注解』教文館、2011年。

³³ 森「自由と責任」195-327頁。

³⁴ ゲーテの自由の概念について論じている先行研究としては大畑末吉などを参照した。大畑末吉「ゲーテの「自由」について」『一橋論叢』50巻1号、1996年、1-17頁。

³⁵ 土橋寶『ゲーテ世界観の研究：その方法と理論』ミネルヴァ書房、1999年や、木村直司『ゲーテ研究：ゲーテの多面的人間像』南窓社、1976年などを参照。

³⁶ 御牧好隆「ゲーテと自由」『文芸研究：明治大学文学部紀要』1号、87-95頁。

近代的な自由の概念全般について独自の思想を展開していることになる。

6. 結論

ドストエフスキーは、シラーやゲーテの描くネーデルランドの独立運動のみに関心を寄せて物語詩『大審問官』を書いたのではなく、プレスコットの歴史書に深く感銘を受けて宗主国スペインの立場を理解した上で物語詩『大審問官』を書いた。この点においてドストエフスキーは、スペインやカトリックに批判的なシラーやゲーテの作品の雰囲気を必ずしもそのまま引き継いでいるわけではない。

しかし、もしドストエフスキーがプレスコットの歴史書のみに基づいて、スペインの歴史により忠実な視点から物語詩『大審問官』を書いていたなら、自由の問題を提起することはできなかったはずである。自由の問題という近代的な問題の提起は、ゲーテやシラーのネーデルランドの独立運動に対する共感から書かれた作品を経由した上で執筆したからこそ可能となった。

『カラマーゾフの兄弟』の登場人物であり物語詩『大審問官』の作中作者であるイヴァンが不正確な知識によって歴史的・地理的・宗教思想の問題を混同したという喜劇的状况の中でこそ、自由のテーマは、スペインの歴史そのものともゲーテの提起した自由の観念とも異なる形で再提起された。物語詩『大審問官』の舞台であるスペインのセビリアは、現実のセビリアそのものであるだけでなく、同時に実質的にはブリュッセルでもありえる。異端審問の対象もスペイン王国に残っていたイスラム教徒とユダヤ教徒であるだけでなく、ネーデルランドのプロテスタントを指している面もある。時代と場所の設定が混同されることによって、物語詩『大審問官』で語られる思想的内容や「自由」の観念もより複雑になっている。

このような物語詩『大審問官』の特徴が、フランス哲学の研究者森有正の自由の概念についての考察に深い感銘を与えることを可能にした。このような物語詩『大審問官』の特徴を考えると、森有正がドストエフスキーを援用してプロテスタントの自由の在り方を考察するのには、歴史的にも社会的にも一定の根拠があることになる。

Исследование поэмы «Великий инквизитор» у Аримаса Мори : концепция «свободы»

КИДЭРА Рицуко

Поэма «Великий инквизитор» в романе «Братья Карамазовы» Ф.М. Достоевского известна тем, что в ней поднимается вопрос о свободе, привлекая тем самым многих исследователей и философов. В данной работе мне хотелось бы изучить версию японского исследователя Аримаса Мори о «Великом инквизиторе». Аримаса Мори является известным исследователем французской философии и литературы, который долго жил в Париже и там преподавал японскую литературу. Кроме того, он серьезно интересовался творчеством Ф.М. Достоевского и написал книгу «Заметки о произведениях Достоевского» (*Dosutoefusukii Oboegaki*). Также в других его статьях о концепции свободы Аримаса Мори упоминает произведения Достоевского, и высоко оценивает их.

Однако, исследуя поэму «Великий инквизитор» Аримаса Мори редко затрагивает историю и культуру России. Когда он изучает французскую философию, он всегда тщетно опирается на историю и социальную ситуацию во Франции, но он этого не делает в случае изучения наследия Достоевского, а скорее понимает поэму «Великий инквизитор» с более общей точки зрения западно-европейской философии. В изучении Достоевского, и особенно в изучении поэмы «Великий инквизитор» обычно считается очень важным именно православие, а Аримаса Мори почти ничего не пишет о православии, а более подробно касается лишь католицизма и протестантизма.

Но поэма «Великий инквизитор» берет своё начало в образе Егмонта из книги о испанской истории У.Х. Прескотта и из пьесы Гете «Егмонт». Если история в Нидерландах является прототипом поэмы «Великий инквизитор», и концепция свободы протестантов от католической церкви становится главной темой поэмы, то тогда трактовка Аримаса Мори оказывается точной.